



日本植物病理学会ニュース 第98号

(2022年5月)

【学会活動状況】

1. 大会開催報告

令和4年度日本植物病理学会大会は、北海道大学および帯広畜産大学の会員で組織した運営委員会により、令和4年3月27日(日)～29日(火)の3日間、オンライン仮想会場において開催されました。当初、札幌コンベンションセンターを会場とした通常の対面方式を予定していましたが、新型コロナウイルス感染症の終息が見込めず、令和3年11月にオンライン方式とすることを決断しました。

3月27日午前9時、大会の開会宣言に続き、大会委員長ならびに会長の挨拶があり、逝去会員の報告のあと黙祷を捧げました。引き続き定時総会が執り行われ、各議案について審議ののち承認されました。理事会のため暫時休憩が取られ、名誉会員・永年会員推挙状、学会賞、学術奨励賞および論文賞の授与式が挙行されました。新会長、新副会長および新旧幹事の紹介のあと、新会長講演(増田税新会長)、学会賞講演(青木孝之氏、高野義孝氏、守川俊幸氏)が行われました。午後からは、学術奨励賞受賞者(井上喜博氏、藤本岳人氏、岡野夕香里氏)の講演に続き、一般講演が始まりました。一般講演の総数は239題を数え、そのうち学生優秀発表賞へのエントリーは92題でした。

今年度の講演方式は昨年度のオンデマンド方式とは異なり、リアルタイム方式としましたので、演者および座長の方々には事前にリハーサルに参加していただくようお願いしました。多くの方々に参加していただき、必要な操作などを確認してシステムの理解が進んだものと思います。セッション間に休憩時間を取って時間調整が可能となるようプログラムを組みましたが、一部円滑に進行しなかった場合もあったようです。不手際がありましたこと大変申し訳なく存じます。講演に対する多くの質疑を受け、議論をより深めてもらうため、LinkBizを利用いただけようにはしましたが、宣伝不足のためかこの機能を活かしきれなかったのではないかと少々残念に思っております。

総計で750余名の参加を頂き、無事に本大会の会期を終

了できました。会長を始めとする学会役員と学会事務局の皆様、座長や学生優秀発表賞の審査をお引き受け頂いた皆様、協賛・ご協力頂いた諸団体、開催準備・運営に当たった実行委員諸氏ならびに学生諸君、オンライン開催の運営に携わった株式会社MONSの皆様には厚く御礼申し上げます。(大会委員長 近藤則夫)

2. 研究会・談話会等開催報告

(1) 第16回バイオコントロール研究会報告

第16回バイオコントロール研究会は、令和4年3月29日(火)にオンラインで開催された。当日の参加者は181名と大変多くの参加を得て開催された。今回は、「バイオコントロールの実用化研究の最前線および展開方向」をテーマとして企画された。基調講演では、古屋成人会長から、「生物防除研究のこれまでとこれから」という演題で話題提供して頂いた。続いて、講演会が二部に分けた構成で行われ、第一部では「バイオコントロールの実用化研究の最前線」というテーマで、飯田祐一郎氏より「微生物殺虫剤ボタニガードESの病害防除における作用機作」および山中聡氏より「微生物殺虫剤ボタニガードESの殺菌剤としての実用化と展開」と題して、微生物殺虫剤として既登録の微生物製剤の病害防除に対する有用性や研究開発状況について紹介して頂いた。また、土壌病害の防除に役立つ新たな微生物資材の開発に関する話題提供として、佐藤孝氏に「*Bacillus*属細菌を利用した微生物資材によるダイズ土壌病害軽減技術」という演題で講演して頂くとともに、内閣府の戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)で行われた新規生物防除資材の素材となる微生物株の探索研究について、窪田昌春氏に「SIPにおける植物病害抑制菌株の探索」という演題で講演して頂いた。第二部では「実用化のためのバイオコントロール研究の展開方向」というテーマで、今後の実用化が期待されるバイオコントロール関連研究紹介として、上野誠氏・新里尚也氏・伊藤通浩氏に「沖縄微生物ライブラリーを活用した植物病害防除の可

能性」, 成澤才彦氏に「エンドファイトー土着細菌共生系が作物生産を変える?」という演題で講演をして頂いた。さらに、今後の中長期的なバイオコントロール研究のあり方や方向性を探るために、近年世界的に高い関心を集めているバイオスティミュラントに関する話題提供として、日本バイオスティミュラント協議会の鈴木基史氏に「日本バイオスティミュラント(BS)協議会とBS資材の展望について」という演題で講演をして頂いた。各演者の報告に対しては活発な質疑応答が行われ、これらを通じて今後のバイオコントロール研究を効率的に進めていく上でのヒントや留意点等が数多く得られたものとする。(吉田重信)

【会員の関連学会等における受賞のお知らせ】

入枝泰樹氏(国立大学法人信州大学学術研究院(農学系)准教授)が令和3年度(第17回)「若手農林水産研究者表彰」農林水産技術会議会長賞を受賞されました。本賞は、農林水産業及び関連産業に関する研究開発の一層の発展及び研究開発に従事する若手研究者の研究意欲の一層の向上を図るため、優れた功績をあげた若手研究者を表彰するものです。受賞の対象となった研究業績は、「病原糸状菌と植物の感染・防御戦略に関する分子生物学的研究」です。また、峯彰氏(京都大学大学院農学研究科准教授)が2021年度(第20回)日本農学進歩賞を受賞されました。本賞は、人類と多様な生態系が永続的に共生するための基盤である農林水産業およびその関連産業の発展に資するために、農学の進歩に顕著な貢献をした者を顕彰するものです。受賞の対象となった研究業績は、「病原細菌に対する植物免疫シグナリングネットワークの動態研究」です。

(宮田伸一)

【今後の学会活動の予定】

1. 部会

(1) 北海道部会

日時：令和4年10月13～14日

場所：かでの2・7(札幌市)

(2) 東北部会

日時：令和4年9月27～28日

場所：コラッセふくしま(福島市)

(3) 関東部会

日時：令和4年9月15～16日

場所：玉川大学(東京都)

(4) 関西部会

日時：令和4年9月21～22日

場所：高知大学(高知市)

(5) 九州部会

日時：令和4年11月

場所：長崎県内を予定

2. 談話会・研究会等

(1) 第21回植物病原菌類談話会

日程：令和4年9月予定

場所：オンライン開催

(2) 第16回植物病害診断教育プログラム

日程：令和4年8月22～26日

場所：秋田県立大学生物資源科学部(秋田市)

(3) 第56回植物感染生理談話会

日程：令和4年9月5～7日

場所：東北大学(仙台市)

(4) EBC研究会ワークショップ2022(第17回)

日程：令和4年9月

場所：未定

(5) 令和4年度植物病害診断研究会

日程：令和4年9～11月頃

場所：オンライン開催

【書評】



「植物医科学(第2版)」
難波成任 監修・執筆, 2022年3月, 養賢堂, 544 pp. A5版, 定価 ¥3,960(税込)
「植物医科学」は、農学のみならず、工学・医学・人文社会学など、あらゆる学問分野に横串を刺し、2008年に初めて体系化された学術領域です。本書はこの新たな領域における初めての教科書と言えるで

しょう。植物を「診る」という視点に立って、最先端の科学と技術に明るく、体得した知見と技能をもって生命に寄り添える人材の育成、そして、植物を取り巻く様々な「現場」を重視した教育の強化を目指して本書は編さんがなされています。

農業生産で最も重要な事は、健康で良質な種苗の確保と維持です。健康で充実した種苗なくして、収量・品質・貯蔵性のいずれも期待が持てないでしょう。特に種苗の流通に際しては、微生物病や害虫病などに罹患していない健康な種苗が確保できなければ、生産者に不利益をもたらすの

みならず、グローバルなビジネスが日常化している現在においては、輸出時に相手国の検疫を通過できません。ひいては野菜の種苗であれば、食料の供給、安心、安全にも大きな影響を及ぼすため、種苗の品質管理は種苗業に留まらず、農園芸業における最重要事項の一つです。高品質な種苗を生産する上で、病害虫管理や養分管理は欠かせません。植物病理学、害虫学、農薬学、雑草学、栽培学、分子育種学、植物生理学など細かく枝分かれした農学分野を統合化した植物医科学は、種苗に携わる方には必修の学問です。本書は、この学問分野を体系的にまとめた貴重な一冊と言えます。

本書前半では、病害虫や、生育環境に由来して罹患する「植物病」について、その歴史や種類、判別と診断方法、治療や防除と予防に関する技術や知識が、まとめられています。本書後半では、食料の安全と環境保全に関する「食と環境を守る植物医科学」、今後発展が期待される「植物医科ビジネス」、また関連する農業環境や生物多様性保全、脱炭素社会に向けた法令と政策、更には植物医科学の社会的役割に付随して「植物医科学に関連した法令と政策」が詳説されています。種苗業界のみならず、関連各業界の今後目指すべき方向について示唆が込められています。一方、章末のコラムもユニークかつ多様なトピックを取り上げており、興味深く、本書の重要なエッセンスとなっています。

本書は、植物・微生物・昆虫といったミクロな生物間の相互作用からの視点に留まらず、それらを含む生態系を俯瞰的に眺める視点、さらには人間とその社会への視点、そして、それら全てを包含する地球環境のマクロな視点といった多層なレンズで、それぞれのテーマに焦点が当てられて解説されています。植物・微生物・昆虫に興味のある方、一歩引いた距離から自然現象を眺めたい方、現場に役立つ診断方法を知りたい方、新たなビジネスの創出といった社会展開に興味のある方など、多くの方にとって価値ある情報や知識が得られるでしょう。難解語句にはルビが振られ、専門用語には脚注に詳細解説が施されているため、大学に入学したての若い方にも読みやすく、農業関連企業や公的機関などにおけるテキストブックといった活用も期待できるでしょう。全頁フルカラーで、初版よりも文字が大きくなり読みやすくなっているのもポイントです。

植物や環境、社会問題に関心のある方、現役の植物医師あるいは植物医師をめざす方、種苗・農薬・肥料・検疫・農業法人・食品企業・樹木医・土壌医のほか、園芸愛好家や緑地・公園・庭園管理者の方々にも必携のバイブルとして推薦いたします。もちろん、良質な種苗の安定供給を使命とし、種苗の開発、生産、供給を担う種苗業を営む私た

ちにとっても必読の一冊です。

((株) サカタのタネ 代表取締役社長, 坂田 宏)

【学会ニュース編集委員コーナー】

学会ニュースは、身近な関連情報を気軽に交換することを趣旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介、書評、会員の動静、学会運営に対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクト研究の紹介などの情報をお寄せ下さい。下記宛先まで、よろしく願い申し上げます。

投稿宛先：〒114-0015 東京都北区中里 2-28-10

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX：03-5980-0282

または、下記学会ニュース編集委員へ：

門田育生、大里修一、宮田伸一、宮本拓也、藤川貴史

編集後記

学会ニュース第98号をお届けします。

令和4年度日本植物病理学会大会は3月27日(日)～29日(火)の3日間オンラインで開催され、750余名の参加があったとのこと。今年度の講演方式は、関係者の皆様のご尽力により、昨年度のオンデマンド方式からリアルタイム方式へ、講演に対する質疑や議論のためにLinkBizの利用など、より効果的な通信環境を整えていただきました。また、第16回バイオコントロール研究会は、令和4年3月29日(火)にオンラインで181名が参加して開催されました。そろそろ対面方式での開催を希望される方もいらっしゃると思いますが、今後の学会活動については、部会、談話会、研究会等の多くが対面開催を予定しているようですので、予定通りの開催が実現するよう期待しております。

つぎに、入枝泰樹氏が令和3年度(第17回)「若手農林水産研究者表彰」農林水産技術会議会長賞を受賞されました。また、峯彰氏が2021年度(第20回)日本農学進歩賞を受賞されました。他の学会等から植物病理学に関する研究が評価されることは、植物病理学が農業や農学の発展にも大きく寄与することを示すものと思います。受賞おめでとうございました。

最後に、上記学会ニュース編集委員コーナーにある委員で編集を行います。これからもどうぞよろしくお願いいたします。(門田育生)